山形南高（山形二中・二高）東京同窓会報

第十号
平成25年10月26日発行
発行人　千代田区平河町2―6―3
山形県東京事務所内
山南東京同窓会事務局
斎藤　常男
編集人代表　小松　栄三郎

志あるところに道あり 希望をもって絆を強め 東京同窓会を 発展させていく

山形南高東京同窓会
会　長　斎藤　常男

大都会での同窓会活動は、難しい。活動は、人々が集まるところから出発する。どこの同窓会でも、どのようにして総会に出席する人々を多くするか、どのようにして会費納入の会員を増員していくかが、大きな課題になっている。

私達の多くは「志」をもって、故郷を離れた。異郷で仕事と生活確保のため、懸命に働き、道を切り開いてきた。

責任ある地位につけば、時間的、精神的な余裕はない。同期会や母校関係の行事等にも出席できない。次第に情報も入らず、関心が無くなっていく。総会に出席しても、知っている人が少ない。

一方で同期会や総会に熱心に出席する人々がいる。また出席しないが会費を納入してくれる人々がいる。このような実情の中で、東京同窓会員の絆を強め、母校の発展に貢献する同窓会をどのようにつくりあげていくか、という重要な課題に直面している。

この課題解決のために留意している主な点は、次の通りである。

1　会の目的実現のため、会員の交流を深め、魅力ある東京同窓会づくりを目指していく。

2　三役の率先垂範の取り組み

三役は、上杉鷹山公の「なせば成る　為さねば成らぬ何事も　成らぬは人の為さぬなりけり」を合言葉に力強く前に進んでいく。

三役は結束を固め、リーダーとして「私を少なくし、欲を少なくせよ」（老子）ということを自覚し、私心がないよう取り組む。困難に出くわしても、断固突き進むという不退転の決意で物事の処理を行う。

組織は、リーダーが先頭を走らなければ、組織を活性化し動かしていくことは不可能である。

三役は「賢くて、しかも行動するリーダー」を目指し、率先垂範していく。

3　課題解決のための意見交換と取り組み

常任幹事会を中心に、継続的に有効策について話し合いを行っていく。具体的な有効策について、力を合わせ実現を図る。

4　総会演出の工夫

出席して良かった、楽しかったと言われるよう総会演出に知恵を出し合い工夫を行っていく。

5　会員への情報提供の在り方を検討

会費納入者には、年1回会報が送付されている。ホームページでも活動状況が流れている。帰属性向上のため、情報の在り方を財政状況を考えながら検討していく。

以上が留意点の一部であるが、ブレる（なんとなく、わけもなく変わる）ことなく、常任幹事会を中心に会の発展強化のため真正面から堂々と歩んでいく。

会員の皆様のご協力をお願いする

『朋遠方より来たる。
亦楽しからずや』

東北で共に生きるために

山形南高同窓会
会　長　佐藤　充彦

「生徒の顔から玉のような汗が流れ、ツルハシが力強く被災地の土地に突き刺さる」山形南高の生徒たちは、今年も東日本大震災被災地でボランティア活動を続けています。約百人の生徒が二班に分かれて被災地に入り、お年寄り家庭を回って力仕事に従事、もう一班は側溝の土砂を取り除き、土砂の中から多くの遺品を発見し、遺族から感謝されました。

あの大震災から二年七ヶ月、首都圏で生活されている同窓生の皆さんは、津波の記憶が薄らいでいるかも知れません。

しかし、山形県内には今も九千人近い被災者が避難生活を送っており、慣れない土地での生活を身近で見ているだけに、県民は支援活動に力を注いでいます。とくに被災地の子ども達に元気を与えようと冬は子ども達をスキー場に招いてスキー教室を開き、夏はサクランボ狩り、キャンプ生活、海水浴、各種スポーツ行事

に招いて交流を深めています。

また、小中学校の先生たちは仮設住宅を訪ねて、学習の手助けを行ない、津波で流された海岸沿いの松林を復元しようと松の苗を大量に育成している子ども達も見られます。

私は被災地を回って来ましたが、そこで感じたことは、被災者の無念さと災害を風化させてはならないと云う声でした。

山形県やＮＰＯなど九二団体で構成する被災者支援ネットワークも設立、山形県民は、東北で共に生きるために献身的な努力を続けています。福島の原発は汚染水の処理も解決していません。廃炉までには四十年と云う途方もない年月が必要です。

我々同窓生は、小さいことしか出来ませんが、息の長い支援の心を忘れてはならないと思います。

北部九州インターハイ、全国高文祭等に、多くの生徒が出場

山形県立山形南高等学校
校　長　佐藤　政士

山形南高東京同窓会の皆様方には、常日頃から、本校教育に対しまして、多くのご支援とご指導をいただき誠にありがとうございます。

さて、今年の山形県高等学校総合体育大会では、バスケット、バレー、バドミントン及びラグビーの４種目で団体優勝を果たすことができました。また、剣道、陸上、ボクシング、バドミントン及び水泳の個人でインターハイ出場を勝ち取りました。実人数で41名の生徒が北部九州で行われたインターハイに出場してきました。また、文化部でも囲碁、将棋、放送の部門で、延べ８名の生徒が全国大会に参加してきました。この他にも、バドミントン、レスリング、陸上でも他の全国大会の切符を８月５日現在で獲得しています。今後、東京で開催される国体やその他の全国大会に、本校生徒が出場する可能性も大ですので、その時は、よろしく応援をお願いいたします。

平成25年度も「武」の部活動の面で、好スタートを切ったところであります。「文」の部分でも昨年度の進学実績を超せるよう日々努力しています。また、山形県の事業の中の一つに難関大学への合格者数増加を狙う事業があります。本校でも難関大学への合格者数を増加させて、ハイレベルの「文武両道」を達成したいと思っています。あわせて、先輩諸兄がこれまで築きあげてきた伝統を受け継ぎ、さらに本校が、発展できるよう今年度も鋭意努力して参りますので、先輩諸兄の変わらぬご支援をよろしくお願いいたします。

ロープウェイ登山

南高３回卒　吉野　禮三

南高出てから今年で60年も経ってしまい、ふがいない人生に慄然とするが、毎日、あきもせずモーツアルトの世界に安住し、梅原猛や司馬遼太郎を読み返し、宮本常一やスーザン・ソンタクの写真論などの愛読書も増えた。しかし、楽しいことばかりではないのだ。日本のエネルギー政策に対する不満は長年携わった職業のせいか憤りを抑えようがない。

平均寿命を目前にして、先に逝く友人も増え憂鬱だが、長い付き合いの写真塾の若い友人たちから、芸術に挑戦する意欲をわけてもらっている。先日は新国立美術館でアンドレアス・グルスキー展をみたが、これが写真か？と思ってしまうアートの傑作にしびれた。

新宿中央図書館の書架から手に取ってみた「ロープウェイ登山」という本にそそのかされ、６月初めから蔵王・地蔵岳、谷川・天神岳、志賀高原・横手山と山頂をいたって簡単に極め、次は、紅葉の八海山に登ろうかと娘夫婦にささやいている。なにせ、山形の〝魔斬〟や〝米鶴〟もいいが、居酒屋で〝八海山〟を見つけると、これでいこうや、と友人を誘導してしまう悪い癖が抜けない。今年早々に急逝した同級生二位関君達といつか佐渡に遊んだ帰り、フェリーから見た八海山の雄姿が目に浮かぶ。

加藤仁衛君は、南高一年五組（西校舎）のクラス会〝一期会〟の幹事を二位関君と共にやってくれた置賜地方事務所長を務めた俊才だが、数十年にわたるこの会も、今年で幕を閉じた。まさに悲しいかなである。その加藤君が『イサベラ・バードの山形路』という書籍を送ってくれた。著者は２００８年に山形第四小学校校長を定年退職された山形生まれの渋谷光夫氏である。イサベラ・バードは『日本奥地紀行』の中で「米沢平野は、南に繁栄する米沢の町があり、北には当時客の多い温泉場の赤湯があり、まったくのエデンの園である。〝鋤で耕したというより鉛筆で描いたように〟美しい。米、綿、とうもろこし、煙草、麻、藍、大豆、茄子、くるみ、水瓜、きゅうり、柿、杏、ざくろを豊富に栽培している。実り豊かに微笑する大地であり、アジアのアルカディア（桃源郷）である」と書いている。これは彼女が山形を旅した１８７８年（明治11年）の情景とはまさに驚きである。新潟の坂町から米沢に通じる旧越後街道のことに、山形市民はどちらかというと疎いが、明治10年には原敬もこの峻厳な峠道を通り山形に入ったと読んだ。

この本は山形出身者必読の書ではないのか。出版社は「無明舎出版」。定価は１８９０円、写真が豊富だから値段が高いのは当たり前だ。134年前の山形を写真を見ながら秋田との

県境まで旅してみてはいかがでしょう。

この本を読んだ以上、八海山ロープウェイ登山の後は、イサベラ・バードの後を追って坂町から渓谷美に酔いしれながら米沢に入り、赤湯に一泊するという計画をぜひ実現したい。

子供の時分から、高湯温泉に宿泊し蔵王に登るのが我が家の年中行事であった。斉藤茂吉や結城哀草果も定宿にしたという〝柏屋〟さんは、今は焼跡が残り浴場の跡からエメラルドのお湯が朝日に映えひたひたと流れていた。毎年お決まりの部屋の窓のすぐ下に見える酢川神社の石段を早朝登り始め、〝どっこ沼〟を経て、最大の難所〝懺悔坂〟をようやく登りきると、赤い前掛けをした石の地蔵さんの前に出る。今ではロープウェイはここまで一気に運んでくれる。地蔵岳を望むこの一帯は、コ

マクサこそ見当たらないが、高山植物の宝庫である。今年は天候に恵まれ、〝タカネザクラ〟別名〝ミネザクラ〟を撮ることができた。ウィキペディアによると、奈良県では絶滅寸前種、埼玉県でも絶滅危惧Ⅱ種であるという。こんな一枚を撮れたのも、ロープウェイ登山のおかげである。

２０１３年９月16日

南高の思い出

南高８回卒　斎藤　勲

運動音痴で帰宅部の私が誘われて蹴球部に入部して一年後、母校のグランドを会場に多数の応援を受け、鶴岡工業高と公式戦を行いましたが、後半戦までに、応援はいなくなりました。０対10で大敗したためです。

次の年は、庄内農業高の会場で、前年負けた鶴岡工業高を準決勝で破り、鶴岡南高に決勝で敗れ、部活が終わりました。

運動会は、山寺駅往復の自転車競走に出ました。三本木沼までの遠足もありましたが、修学旅行はありませんでした。

個性豊かな恩師に恵まれ、渾名で呼ばれる方も多く、教頭先生は「お父ちゃん」と愛称されて、先生の「長恨歌」の朗詠が大人気でした。要望があると、あの満足そうな笑顔で歌い始めました。朗詠は独特で面白く、聞く人を引きつけ、安らぎとここち良さを与えてくれました。

教室内だけでなく、廊下を通る元気な南高生の耳に溶け、足を止めて静かに聞き、惚れさせました。もう一度聞いてみたいお父ちゃんの「長恨歌」です。

白内障で曇った目と、腰痛に悩む現実に戻ったとき、手もとの卒業記念品のこの盃で飲めることに乾杯したいと思います。

年寄りの妄想
人類は何処へ消えて行く

南高10回卒　平澤　一宏

地球上に人類が住めなくなるのはいつの日か？　地球が出来たのが46億年前、人間らしき猿人が誕生したのが400万年前といわれ現在の新人に変化している。地球が出来てからの人間の歴史はほんの微々たるものである。しかし既に人間の将来が危うくなってきている。

人間の住む地球はどうなっているのか、緑の木々は切り取られ、極端に少なくなっており植樹が進められているがとても元に戻す事など出来そうも無い。地下資源は無制限に掘り起こされ、既に石油資源は枯渇するといわれている。他の鉱物資源も開発され目に見えるすべての品は地下資源から出来ているのではないか、大都市はビルが立ち並びコンクリートと鉄骨の塊である。都心にいると太陽の暑さは当然のことながらむしろ地上からの反射熱もまた同じように暑い。温暖化が加速していると思われる。

緑が少なくなり地下資源の開発が進み自然の中で生活している動植物は生き場を失い、次々と消えている。人間の仕業と言えないだろうか。海には人間の生活残骸が流れ込み海中は汚れに汚れている。魚の生き場も失われつつある。空気汚染がひどく温暖化が問題視され更に進むととても人間は住めなくなる。これらはすべて人間の驕りで日毎に進んでいっている。

地球はそこに住む全ての動植物の生存場所であり人間の支配下にあってはならない。地球上に住む動物たちは人間によって窮地に追いやられ消えていく。人間も自分たちで環境を変え消え去る時期を待つことにならないだろうか。これから何万年後

には地球脱出が必然性を帯びてくるような気がしてならない。人間は知ってか知らずか無数の人工衛星を宇宙に飛ばし人類の新たな生存場所を探しているように思えてならない。今日9月14日人工衛星イプシロンが打ち上げに成功したとのニュースが流れている。

人生、まだ登り坂

南高11回卒　有海　豊

先ず「文武両道」の南高へ感謝します。

昔のことを振り返ってみると、秋の「全校生マラソン大会」のことが思い出に残っている。運動の苦手な私だが、毎年、順位は中間位であった。走ること自体は嫌いではなかったが、私にとっては「走ること」そのものが、大いに勉強になったと思っている。

走ることそのものが単純ではあるが、耐える（完走する）ことが身についたと思う。自分を鍛えるということでは、精神的、肉体的に人間、大きく成長に結びつくことで・・・。

30代ごろから、ジョギングを始め、各地で催されるマラソン大会に参加し、（最近はウォーキングに転向）走っている時は辛いが耐えることの喜びを味わっている。

人生において、自分に克つことが、いかに大切なことか、私なりに鍛えることをいつも考えている。

今、仕事を元気に続けられるのも、このようなお陰と思っている。

仕事だけではなく、種々と見聞を拡げ、身につけ行動しなければならないと考えている。又、足りない点は沢山あるが、修養し、身につけ、自分の坂道を、あせらずにゆっくり登り続けたい。

70の手習い

南高12回卒　毛利　昭

今年の7月22日で満70歳を迎えました。古くから古希と呼ばれる年齢へ突入した訳ですが、古希とは体の関節がコキ・コキときしみをあげるのが語源ではないかと勘ぐっている今日この頃です。しかし、地味で目立たなかったこの日が、英国のロイヤルファミリー・ジョージ君の誕生日と重なり一躍注目される日となってしまいました。

さて、これまで同様、区切りの年代（50歳60歳など）を契機に何か新しいことに挑戦しようと捜していたところA・SAX（アルトサックス）教室の広告が目に飛び込んできました。これまで笛を吹いたことはおろか管楽器に触れたことすらありませんでしたが、入会の申し込みを行い楽器も購入しました。師匠はナカジマ・カオリというプロの女流奏者ですが、なかなかの腕前の方（当然か）で、その世界では知られた存在の方でした。

三月から月2回のペースで稽古（一般的にはレッスンと呼ばれております）を開始したわけですが、楽器の組立から教えて貰う体たらくで、音が出なかったりずれたりするのは日常茶飯事でした。ところが、師匠から「七月末にコンサートをやるので練習に励むように」との厳命があり、門下生一同（と言っても5名ですが）気合いを入れ直した訳であります。ところが問題はサックスの練習場の確保です。音が大きいので近隣には迷惑は掛けられない、カラオケボックスが最適であるとの指導もありましたが、ボックスへ行っても練習よりマイクの方が気になるということもあり苦労を重ねましたが7月27日「港区神明プラザ」なる施設で行われた「Plaza Shimmei Summer Jazz Concert」でナカジマカオリカルテットの前座としてステージに立つことになりました。

話は変わりますが、前日の26日にアルピニストで富士山クラブの理事を務めておられる野口健氏の出版記念パーテーが都内で行われました。富士山クラブの末席を汚している私もそのパーテーに参加して来たわけですが、富士山クラブとは会長が王貞治氏、理事長が高野連会長の奥島孝康氏のもと、富士山麓の清掃活動や森林保全活動などを行っている特定ＮＰＯの団体です。今回は写真集『野口健が見た世界』と題する本のパーテーだったわけですが、主賓としてナベサダことサックスの帝王・渡辺貞夫氏が挨拶をなさいました。さっそく80歳を過ぎた今でも世界の第一人者として活躍しておられる氏の下へ駆けつけ、一緒に撮ってもらったのが左の写真です。なお、この写真は義村貞純／株式会社アドベンプロダクツの義村氏に提供を受けました。「70の手習いでサックスを始めた。明日がその発表会だ」と言ったところ大変喜ばれ、握手で激励してくれました。そのせいか、翌日の演奏は上手くいったと確信しております。

まあ、そんな訳でいろいろなことへ顔を出して動き回っておりますが、行く先々で新しい出会いがあり、人の世のありがたさを感じているところです。これからは「般若心経」などでも諳んじ、精神的な高みをも目指そうと考えているところです。

校歌・応援歌に育まれた人生

南高12回卒　原田　嘉行

「12会」の代表幹事の小松真一君より同期会の案内と共に『同窓会報』第36が届き、佐藤充彦会長の「校歌作曲者、信時 潔の系譜」で、かの（海ゆかば）の作曲者の校歌であると知り驚嘆し、校歌の旋律が琴線に触れることの得心がいき、入学まもなく赤間道義先生が「先輩野球部が甲子園出場を果たし、南高の校歌・応援歌（空はコバルト）それに校章は出場校の中で一番、誇りである」と語ってくれたことを思い起こしました。

実は、校歌の作詞者の神保光太郎先生は、何と小生が入学した日大芸術学部の主任教授で、三行詩などを教わり、卒業謝恩会では同郷の山形の話をされ、一緒に写真を撮っていただきました。神保先生は埼玉県出身でなかったが、埼玉の文学活動に貢献されて、「さいたま文学館」（桶川市）にあの田山花袋らと並んで、その人と作品が紹介されており、さらに先生が散歩された別所沼公園に碑も建ち、機会ある毎に文学館を訪ねて先生を偲んでいます。

また、応援歌（空はコバルト）の作曲は母校の音楽教師森山三郎先生で、作詞は当時の生徒であると聞いていましたが、はっきりせず、先頃の飲み会で小松君に尋ねると、その場で電話をして作曲は森山先生で、作詞は生徒の岩松俊次さんであることを調べてくれ、長い間確認したかったことが氷解しました。

南高で美術を選択したこともあって森山先生の授業を受けたことはありませんが、卒業時のクラス担任だったことで、先生の薫陶を受けることができました。わずか3年間の高校生活で、出来損ないの生徒でしたが、この古希までどうやらこうやらやってこられたのは、誇れる校歌・応援歌、そして心温かい恩師の教えに、掛け替えのない校友がいたからと感謝しています。

これからの人生も、校歌・応援歌をより所に過ごしたいと思います。

（最前列の右から三人目が神保先生―「さいたま文学館展示室案内」より）

身近な薬用植物あれこれ 秋の七草・クズの話題

南高12回卒　奥山　徹

２０１３年の夏は、島根・鳥取、秋田・岩手での集中ゲリラ豪雨の到来、そして山形新幹線も何度か運休させられた雨の被害。更に埼玉・千葉では竜巻に襲われた。

残暑厳しき中にあっても、朝夕の虫の鳴き声とともに初秋の植物・キキョウやクズの花が目につく。これらはいずれも秋の七草として、『万葉集』でも歌われている。

秋の野に咲きたる花をお指折り
　書き数うれば七種の花
萩が花、尾花、葛花、撫子の花、
　女郎花、
　また藤袴、朝顔の花

『万葉集』山上憶良

「秋の七草」はいずれも重要な薬草・生薬・漢方薬として珍重されており、昔から生活に結びついた馴染みのある植物でもある。

クズ（マメ科）の葉は大きく昔は墓参りで食べ物を載せるのに使った。クズの花は二日酔いに効く。茎はクゾバともいい薪や柴を縛るのに具合がいい。またツルは葛布として衣服、ワラゾウリや小物入れの造作に用いる。根からはクズ（葛粉）を採る。吉野葛や掛川葛の和菓子や葛切りが市販されている。葛湯は筆者の受験勉強（特に冬期間）には欠かせないものとして蘇ってくる。

クズの根（葛根）は重要な生薬で、代表的な漢方薬「葛根湯」の構成生薬の一つである。「葛根湯」の証は『傷寒論』（中国の後漢時代の古典）によると、発熱、悪寒あるいは悪風、頭痛がして首筋や背中の筋肉が痛む者に用いるとある。すなわち風邪の初期に用いるのが最適である。

明治薬科大学名誉教授・理事

クズの花

恥ずかしながら自慢話を少々

南高14回卒　佐藤　守彦（柔道部）

東京五輪開催決定、レスリング競技継続実施決定。

私は、この決定的瞬間、拓殖大学の学友会韓国支部創立60周年記念式に学友会副会長として参加後、同行者達とホテルのＴＶでＮＨＫ衛星放送を固唾をのみ見守っていた。決定の瞬間は日本国民全員がそうであった様に、我々も全員で立ち上がり、

思わず万歳をし、その後は酒盛りをした事は言うまでもない。

現在、拓大レスリング部ＯＢ会の会長を拝命、レスリングの継続が決定した事で、後輩達の夢（目標）がまた持ち続けられる事に、心の底から何度も何度も喜びが込み上げて来た。

昨年のロンドン五輪レスリングでは、日本代表選手７名中、４名が拓大の後輩で、しかも米満が金メダル、湯川が銅メダルを獲得、大活躍をしてくれた。言わせて戴ければ大学は勿論、全日本でもトップクラスの選手が続出し、今や我が部は日本レスリング界に無くてはならない存在、と言っても過言ではない。

私は、南高時代は柔道部、海外雄飛を志し、校長推薦（故東海林校長）で拓大に入学、縁あってレスリング部に入部する羽目になり、頑張って主将となり、監督も経験、ＯＢ会の副会長を約25年、会長は４年目、文字通り長きにわたり、唯々強くしたいが為、臥薪嘗胆を何回も繰り返し、やっと今日少し花が咲き始めたところです。

私の原点は〝南高柔道部〟にあり、当時の南高柔道部はインターハイ出場の常連校と言っても過言ではない位強かった。しかし山口馬車先生はじめ、上級生、先輩達からも、今のいじめ、体罰等の陰湿な行為は全くなかった、皆が〝愛情と慈悲の心〟で指導して下さった。我等14回生７人（７人の侍、と勝手に称している）は、それに応えインターハイ団体出場を果たした（その後、今日まで団体でのインターハイ出場はない）。

私は、この３年間で身に着けた指導者の〝愛情と慈悲の心〟で、後輩の指導を続けて来た。今他のスポーツで問題を起こしている指導者達は、この〝愛情と慈悲の心〟が欠けていると私は深く憂いている。この精神は私が会長を辞任しても後輩達に継続させ、リオ、東京五輪でロンドン以上の〝日の丸〟を高々と掲げさせたいと、レスリングが継続決定したことから、ますます闘志が燃えて来た。

合掌

2012年ロンドン・オリンピック
拓大出身代表選手
（左から高谷惣亮・磯川孝生・米満達弘・湯元進一の各選手）

今は亡き・母を思う

南高15回卒　滝口　成一

「夫婦とは二世の縁とか、我もまた二世の縁　結びたし」

卒寿を過ぎ床に伏せていても気丈だった母、今は亡き母を見送ったとき「墓誌」に刻んだ母の残した最後の言葉です（仏教の教えには、前世、現世と来世とがあるとのこと、二世（ニセ）とは現世と来世とを、縁（エニシ）とはエンを意味します）。

暑かった夏も終わりに近づき秋風が吹く頃、マル３年目の母の命日、10月がまた巡ってきます。思い起こせば、夢に描いた？リタイアした後の輝く？第二の人生、順番とは言え、母の介護にて、もろくも崩れさり？「いつ終えるともしれない、先の看えなかった在宅での介護に明け暮れた日々！」　もう過ぎ去った過去の出来事？の一つとなってしまいました。今はただただ「モットもっと…もっと母に寄り添い優しくしてあげるべきだった！　無理を押してでも母の最後の願い、行きたかった思い出の地へ連れて行ってあげるべきだった！」と後悔の念だけが胸を締め付け、墓前にて「ごめんネ！」と、そして、母の生きてきた過去に思いを馳せながらも寿命をまっとう出来たものと信じて、今年もまた手を合わせているのでしょうか？

人は皆、いつかは肉親をも含めた「死」に直面し、否応なしに「別れ」を受け入れざるを得ないときに直面します。その時に後悔しないようにと考え行動を取ってみても、やはり「子を持って知る親の恩」の諺のように、頭で分かっていても、その時が来ないと真に理解は出来ず、後悔だけが残るのでしょうか？

でも、いつまでもクヨクヨしてはいられません。残り少ない？残された自分の人生を精一杯生き抜こうと思います。それが両親を見送った子の責務と考えて。

私も、そして、皆さんも、いつの日にか、これまで一緒に共に歩んできた道を振り返るときが来たときに、互いに「来世もまた縁を結びたい！」と思える、言える夫婦でありたいと思うのです。イヤ願わざるを得ません。

（米国コンピューターメーカー・リタイア　柏市在住）

「ＡＫＢがグアムを走る」で思ったこと

南高28回卒　峯田　淳

東京五輪開催が決まった直後、南青山にあるスポーツメーカーのオフィスで、ＡＫＢ48やグループのメンバー11人の取材、撮影を行っていました。勤務している夕刊紙（日刊ゲンダイ）で、「第２回グアムインターナショナルマラソン」（14年４月13日）をＡＫＢのメンバーが走るとい

う連載を始めていて、その４回目の撮影でした。

今年４月の第１回大会を３人のメンバーが走り、日本だけで900人近い参加者が集まりました。これを受けて事務所と相談したところ、「第２回は20人以上」ということになり、その半数が集まって行われたものです。この会報が出る前には記者会見も予定しているので、もっと公になっているかもしれません。

50代も半ば、スポーツもやったことがないのに、アイドルとマラソン企画という”重労働“です。ただ、７年後に五輪が開催されることを考えると、アイドルが走るのもそれなりに意義があることなので、成功を目指してやるしかないでしょう。

この企画を始めて気になっていることもあります。最近は各地でマラソン大会が開催され、参加者が驚くほど増えています。山形でも「さくらんぼマラソン」や10月６日に第１回大会が開催された「まるごとマラソン」などいくつもの大会があります。各自治体がスポーツイベントとして地域の掘り起こしでやっているのだと思います。

しかし、市町村などの自治体レベルでやるのは非礼を承知でいえば、自己満足的な意味合いもあり、限界があるのではないか。東京マラソンや青梅マラソンのような都会の市民マラソンは別格としても、ある程度横断的な規模の大きな企画にしないと、少なくとも地域のアピールにつながらない。今のマラソンブームが「隣りの市もやっているからウチも」という発案で成り立っているとしたら、７年後まで持つのかというのが個人的な意見です。

20年東京五輪は復興期、成長期だった64年大会とは明らかに異なる、日本にとっての未体験ゾーン。東京や被災地だけではなく、地方にも何らかの影響があるはずです。

そこで、「ＡＫＢが走るグアム」やマラソンはともかく、同窓会も７年後を視野に入れてはどうでしょうか。

南高祭特集

在校生からの電話

南高15回卒　小松栄三郎

今年の８月12日、南高の三年生から電話をもらいビックリした。電話の内容は「今年の南高祭は第50回を迎えます。第１回南高祭実行委員長をされた小松さんから、南高祭が生まれた経緯を後日送付する用紙に書いてお知らせ戴けませんか。」というものであった。

私は南高祭が第50回を迎えたことに感慨もひとしおだった。そして在校生から電話をもらったことが、無性に嬉しかった。

後日送られてきたアンケートの内容は「①どうして南高祭を開催しようとしたのですか。②初代実行委員長として大変だったことはどんな点でしたか。③今年50回目を迎える南高祭を支える、今の南高生に一言あればお願いいたします。」というものだった。

私は次のように回答した。

南高祭実行委員の皆様へ

このたび、第１回南高祭実行委員長としての所見を述べさせていただく機会を与えていただき、大変嬉しく、また光栄に思います。

【質問１】どうして南高祭を開催しようとしたのですか。

回答：南高祭が開かれる前は、体育祭と文化祭を別々にやっていました。昭和39年（１９６４年）の１学期、私が３年生だったとき、生徒会役員と学級委員長の合同会議（会議の名称は忘れてしまいました）が開かれた際、「体育祭と文化祭を一緒にやろうじゃないか、その方が南高らしく燃えられる。」というような意見が出たのです。そして、それが決議されたのです。

その年の秋には、東京オリンピックが開催されようとしていました。日本中が沸いていましたから、その影響もあったのかも知れません。何しろ南高生は燃えますから、そういうことはすぐ決まるのです。

ついでながら、なぜ私が実行委員長になったのでしょう。実行委員長を選出する際、「３年生は受験があるから、２年生にやってもらいたい。」という意見が出ました。確かに３年生が秋にそのような大役を担うのは大変です。当然すぎる意見だったわけですが、私はその意見に反対しました。今でもよく覚えているのですが、「このような大事な行事を３年生がやらないのは、オカシイ。それでは成功しない。」と発言したのです。「では、おまえがやれ。」と言われ、引き受けざるを得ませんでした。

南高祭は、大いに燃え、大成功裏に終了しました！

【質問２】初代実行委員長として大変だったことはどんな点でしたか。

回答：第１回目の南高祭ですから、単に体育祭と文化祭をくっつけたようなものでは飽き足りません。創造性を打ち出すことが一番大変でした。みんな試行錯誤でやりました。夏休みも返上で、話し合いを重ねました。討論会の準備は特に大変でした。「男女交際」から「共産主義」まで、多くのテーマを設けました。ほとんどの教室を使わなければなりませんでしたから、その教室の割り振りや司会や書記などを決めるのが大変でした。

【質問３】今年50回目を迎える南高祭を支える、今の南高生に一言あればお願いいたします。

回答：50年も続いたかと思うと、感無量です。ホームページで拝見していますが、南高祭で燃える南高魂は変わっていないですね。どうぞ、50回目というすばらしい節目で開催できる幸せを存分に味わって、精一杯燃えてください。ぜひ３年生諸君が引っ張って行ってください。もし、秋に東京オリンピックの開催が決ま

ったら、どうしましょう！

9月17日、私の回答メールを受け取った文化委員長の小松涼君らが作成した南高祭のＤＶＤが郵送されてきた。

それは見事な内容だった。第1回などとは比べものにならない規模の南高祭だった。私は唸った。しかし、映像を見ているうちに気づいた。燃え方が第1回目と同じなのだ。50年間、南高の生徒達は、燃えるという伝統を守ってきたのだ。第1回も第50回も南高生に変わりはなかった。

親切にも、私たちが苦労した討論会のテーマがいくつか映像に映し出された。第1回のパンフレットも映し出された。懐かしかった。そして階段を上っていくように50回分の南高祭のテーマが映し出されていく。教師となって南高に戻ってきた卒業生達も、在校生だったときの南高祭が紹介されるなど、力作だ。

最初に電話をくれた生徒は、菅友紀君、メールでやりとりしたのは小松涼君。二人ともさわやかな青年である。私は高校の英語の教師になったが、私と同姓の小松君も英語の教師を目指しているという。これにもビックリ。最後のビックリは、東京オリンピックの開催が今年決まったことである。50年前の東京オリンピックの年に第1回南高祭が行われた。第50回南高祭を記念する年に、再び東京オリンピック開催が決まったのである。ビックリ！ビックリ！

＊

生徒会の皆さんは、東京同窓会の皆さんが「山形南高校ホームページ」「生徒会ホームページ」をご覧になるよう願っています。

在校生より

三年生　菅　友紀

私達は、50回目の南高祭を開催できる喜びと責任を感じ、例年より早く実行委員会を組織し、委員長の渡邊尚志を中心に準備を進めてきました。先輩方が築き上げてくださった歴史を引き継ぎつつ50周年にふさわしい新たな伝統を創造し、老若男女が楽しめる、男らしさあふれる南高祭を目指そうというコンセプトのもと、6月の合宿において、南高祭スローガン「男舞（おとこまえ）～粋がりやがれ野郎ども　50年分あげちゃうよ♥～」を決定しました。

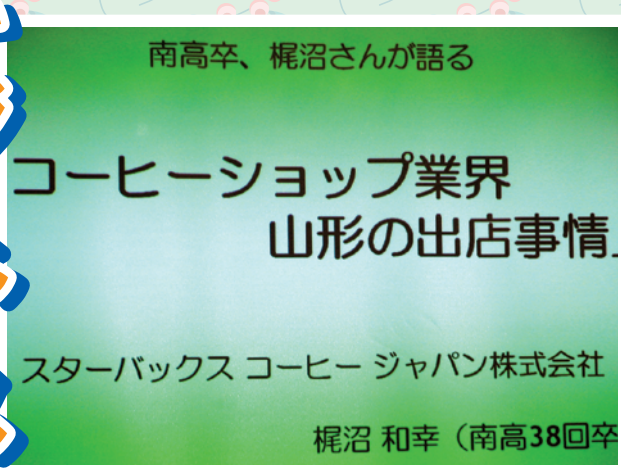
前夜祭の仮装行列には130名を超える生徒が参加し、山形駅前と七日町でＰＲを行いました。体育祭では、騎馬戦やポイント争奪戦などの競技終了後、生徒・職員全員で「50」の人文字を作り記念撮影を行いました。文化祭では、各部活動発表・本校の震災復興ボランティアの報告・南高祭50年を振り返るビデオ上映などで大いに盛り上がりました。

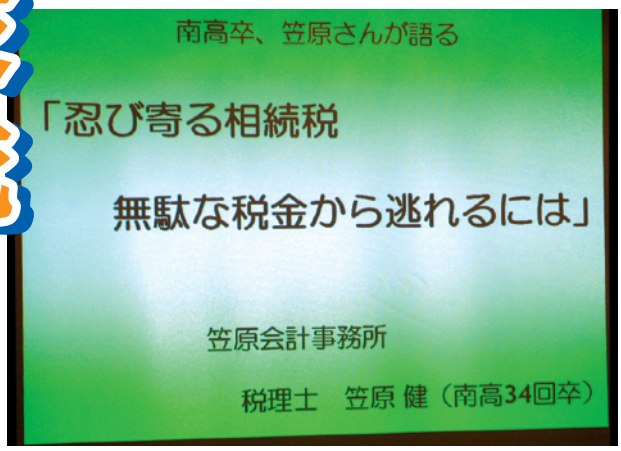
一般招待日では、10周年を迎えたウォーターボーイズが、大観衆の前で息の合ったシンクロを披露し、初の試みとなったチアボーイズ（南高生がチアガールの格好をして踊るもの）では、観客からたくさんの笑顔と声援を頂戴しました。3年前から書道部が行っている書道パフォーマンスでは、東日本大震災で被災された方へむけたメッセージを書に表し、一緒に頑張ろうという思いを来場者と共有できました。また、50周年特別企画として、南高生活を撮影した２０００枚の写真を並べて南高の校章を表現した「ビッグアート」を展示しました。この日の来場者は近年最多の３２９２人に達し、大盛況のうちに閉祭しました。

これほど多くの方々に楽しんでいただき、共に南高祭を満喫できたことを私達は誇りに思います。ご支援くださった皆様、本当にありがとうございました。これからの山形南高校のさらなる活躍にどうぞご期待ください。

（詳しくは、南高祭ブログ http://yamananan.weblogs.jp/nanfes/50th/ をご覧ください）

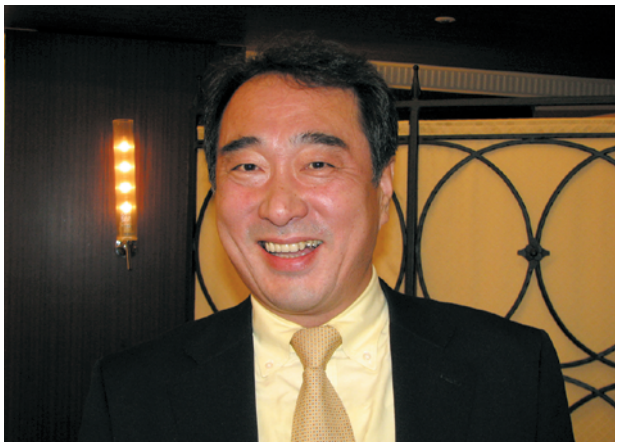
総会と初のビジネス交流





山形から駆けつけてくださる

南高魂よ、永遠なれ！



25年度役員紹介

会長　斎藤　常男（南高5回）
副会長　毛利　昭（南高12回）
副会長　小松栄三郎（南高15回）
監査　久連山幹彦（南高10回）
監査　加嶋　隆夫（南高12回）
常任顧問　浅黄　優喜（南高4回）
顧問　会田　雄亮（二高2回）
顧問　森谷　享（南高1回）
顧問　土屋　裕司（南高2回）
常任幹事　平澤　一宏（南高10回）
常任幹事　有海　豊（南高11回）
常任幹事　佐藤　守彦（南高14回）
常任幹事　滝口　成一（南高15回）
常任幹事　鈴木　淳一（南高25回）
常任幹事　村岡　登（南高25回）
常任幹事　杉本　俊夫（南高28回）
常任幹事　峯田　淳（南高28回）
常任幹事　我孫子雅敏（南高29回）
常任幹事　笠原　健（南高34回）
常任幹事　山田　健嗣（南高36回）

お世話になります 東京事務所の南高卒業生

齋藤　正明（南高30回卒）
飯野　典朗（南高39回卒）
鈴木　孝幸（南高39回卒）
小関　啓幹（南高40回卒）
佐藤　良和（南高43回卒）
漆山　敬人（南高44回卒）

平成２４年度会計報告

山形南高東京同窓会　平成２４年度　収支決算書

＜収入＞　（単位：　円）

項目	H24年度予算額(A)	H24年度決算額(B)	比較増減(B-A)	摘要
総会会費	725,000	552,000	△173,000	7,000円x76名＋5,000円ｘ4名
年会費	700,000	566,000	△134,000	2,000円ｘ283名
寄付金	70,000	105,200	35,200	総会来賓祝金ほか
広告協賛	100,000	105,000	5,000	
雑収入	0	19,439	19,439	預金利子など
前期繰越金	87,427	87,427	0	
合計	1,682,427	1,435,066	△247,361	

＜支出＞　（単位：　円）

項目	H24年度予算額(A)	H24年度決算額(B)	比較増減(B-A)	摘要
会場使用料	30,000	39,385	9,385	総会会場費
懇親会経費	630,000	585,733	△ 44,267	飲食費、抽選会景品代、会場使用料を含む
会議費	100,000	113,925	13,925	役員会弁当代、会議室使用料等
総会案内経費	260,000	265,404	5,404	
議案書印刷経費	160,000	125,475	△ 34,525	
事務費	110,000	75,080	△ 34,920	消耗品代、郵送運搬費、会報発送料、振込手数料等
東京同窓会会報	250,000	205,515	△ 44,485	
ホームページ制作費	30,000	4,240	△ 25,760	
活動費	55,000	20,000	△ 35,000	同窓会本部総会広告協賛金
予備費	57,427	0	△ 57,427	
合計	1,682,427	1,434,757	△247,670	

次年度繰越（収入合計－支出合計）　：　309円

山形南高東京同窓会　特別積立金　平成２４年度　収支決算書

＜収入＞　（単位：　円）

項目	H24年度予算額(A)	H24年度決算額(B)	比較増減(B-A)	摘要
前期繰越金	461,660	461,660	0	
寄付金				
合計	461,660	461,660	0	

＜支出＞　（単位：　円）

項目	H23年度決算額(A)	H24年度予算額(B)	比較増減(B-A)	摘要
母校貢献策	0	0	0	
合計	0	0	0	

次年度繰越（収入合計－支出合計）　：　461,660円

母校の進学状況

平成25年度大学進学数

《国立大学》	現役	過年度	合計
	135	32	167
京都大学		1	1
山形大学	46	8	54
新潟大学	25	3	28
東北大学	15	2	17
福島大学	11	2	13
埼玉大学	10	2	12
宮城教育大学	5		5
宇都宮大学	3		3
秋田大学	2		2
茨城大学	2	1	3
千葉大学	2	3	5
信州大学	2		2
横浜国立大学	2		2
富山大学	2	1	3
北海道大学	1	1	2
北教大札幌校	1		1
岩手大学	1	1	2
筑波大学	1		1
東京外国語大学	1		1
東京学芸大学	1		1
静岡大学	1		1
愛媛大学	1		1
福岡教育大学		1	1
山梨大学		1	1
前橋工科大学		1	1
一橋大学		1	1
名古屋工業大学		1	1
電気通信大学		1	1

《私立大学》	現役	過年度	合計
	222	94	316
東北学院大学	38	2	40
東北福祉大学	8	6	14
東京理科大学	9	4	13
法政大学	6	6	12
日本大学	8	4	12
東北芸術工科大学	9	3	12
明治学院大学	6	4	10
芝浦工業大学	7	3	10
中央大学	5	4	9
神奈川大学	7	1	8
東海大学	4	4	8
文教大学	7	1	8
青山学院大学	3	4	7
東洋大学	5	2	7
駒澤大学	6	1	7
獨協大学	7		7
国際医療福祉大学	6	1	7
立教大学	5	1	6
早稲田大学	3	3	6
大東文化大学	5	1	6
玉川大学	6		6
東京農業大学	5	1	6
専修大学	3	2	5
明治大学	2	2	4
同志社大学		4	4
成城大学	1	3	4
東京経済大学	4		4
國學院大學		3	3
国士舘大学		3	3
上智大学	3		3
慶応大学	1		1
学習院大学	1		1

その他多数の大学

平成24年度 物故者

平成24年9月15日以降
25年8月30日判明分まで
敬称略

(旧職員)

橋本 晶夫 先生 美術 (S26・4～47・3) 25・4・17

(同窓会員)

[二中卒]

1回卒 菊地 武雄 25・8・7
4回卒 安達 昭一 24・7・1
4回卒 安藤 富司 25・1・?
4回卒 高橋 謙治 25・7・21
4回卒 田中 幸男 25・2・12

[南高卒]

1回卒 三浦 良一 25・2・28
1回卒 山下 和夫 25・4・20
2回卒 楳津 隆次 25・1・9
2回卒 後藤 忠 24・11・28
2回卒 土屋 裕司 24・12・19
3回卒 荒井 正美 24・6頃
3回卒 伊藤 吉雄 24・5・12
3回卒 斉藤 光弘 25・6・?
3回卒 佐藤 昌義 24・3・13
3回卒 志済 光注 24・9・3
3回卒 二井関 秀雄 25・2・19
3回卒 山川 民雄 25・7・15

4回卒 青山 健二 25・7・19

元スポーツOB副会長

5回卒 金沢 成章 25・3・22
5回卒 矢作 徹雄 24・7・28
6回卒 石井 登子 25・6・8
6回卒 海谷 実 25・1・5
6回卒 鈴木 広雄 24・5・2
7回卒 荘司 輝雄 25・2・17
7回卒 山口 務 24・10・13
8回卒 伊勢 昌弘 24・5・15
8回卒 伊藤 正夫 25・3・23
8回卒 林 榮容 25・9・6
9回卒 礒辺 清武 24・12・9
9回卒 原田 実 25・5・25
10回卒 庄司 光一 24・12・23
11回卒 鈴木 信彦 25・9・4
11回卒 高橋 昌之 25・1・6
12回卒 内野 庄八 24・12・19
12回卒 高橋 睦夫 24・12・11
12回卒 村田 利範 25・8・2
14回卒 小松 秀一 24・10・?
15回卒 庄司 精一 25・7・26
16回卒 関 隆次 25・8・27
16回卒 門間 司 25・8・19
17回卒 国井 正寛 24・5・28
26回卒 遠藤 宏一 24・12・3
26回卒 吉川 信一 25・7・30
29回卒 高橋 吉徳 25・3・17
32回卒 岩澤 治 25・8・4
42回卒 土田 俊宏 25・3・24
43回卒 和泉 邦彦 25・6・2
55回卒 漆山 翔太 23・?・?
55回卒 岡崎 新 24・12・9
55回卒 本間 優 24・8・?

来年の原稿募集

７００字前後。写真も可。
原稿〆切　26年8月31日。
メールでの寄稿歓迎。

eizaburou@mug.biglobe.ne.jp
〒286-0011　成田市玉造4－34－2
小松栄三郎宛て

山形南高東京同窓会ホームページのご案内

URL:http://yamanan.jp

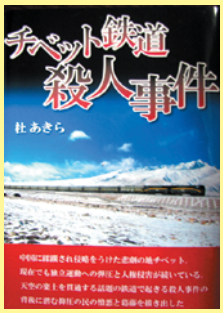
平成20年２月に正式公開
新ホームページ　平成23年６月に公開
(旧ホームページは平成23年12月31日で終了)
ＨＰの主担当者：村岡　登氏(南高25回)

協賛広告募集中　お問い合わせ info@yamanan.jp

著書紹介

『チベット鉄道殺人事件』

郁朋社　２０１３年　１０００円＋税
著者　杜　あきら（南高12回卒　毛利　昭氏）



著者の独自の視点でチベット問題の本質を鋭くえぐり出した「社会派サスペンス小説」（著書の帯）。山岳小説家としてデビューした著者のヒマラヤ描写も見事。

※郁朋社
TEL. 03-3234-8923

『渡辺多満の生涯』

タングラム　２００８年　３８００円＋税
著者　鈴木　隆（南高15回卒　鈴木　隆氏）

明治、大正、昭和の時代に、横浜で慈善事業、社会事業、教育事業に「人知れずひそかに支援や援助を」した一人の女性の伝記を、著者の鈴木氏は21年の歳月を費やして描き切った伝記文学の白眉。

※米国スタンフォード大学図書館購入。

篤志家のご寄付のお願い

東京同窓会の活動費のためにご寄付下さる方々を募集しております。
郵便局の次の口座までご送金下さいますようお願い申し上げます。
口座名：山形南高等学校同窓会東京支部　　口座記号番号：００１１０－７－５８１４２０

編集後記

今号では、母校を強く意識する紙面にした。「南高祭」を特集し、南高祭に係わった在校生からも寄稿してもらえた。読者の中には遠くの母校が身近に感じられた方も多かろうと思う。南高祭での活躍だけではない。佐藤会長が触れておられたように、被災地でのボランティア活動には目を見張るものがある。東北福祉大学や国際医療福祉大学に多数進学していることも、ボランティア活動の影響かも知れない。また、東北大学に17名も進学したことには驚いた。山形大学、新潟大学、東北大学、福島大学、東北学院大学といった山形の周辺の大学に多数進学していることになるが、一方京都大学初め、全国の大学に挑戦している後輩達の南高魂にエールを送りたい。

いま東京同窓会では、総会出席者数及び会費納入者数を増やす手立てをいろいろ考えている。そのひとつの方法として、「部活でのつながりを生かそう」というアイディアが浮上している。部活の盛んな南高であるから、可能性は高いと思われる。ぜひ会員諸氏の妙案をお寄せ戴きたい。

今年の４月17日に橋本晶夫先生が逝去された。昭和26年度から46年度の20年間南高に勤務された。新潟地震の時、われ先に校庭に逃げて行かれるのを、我々は２階から見下ろしていた。その走り方があまりに不格好だったので、みんなで大笑いした。しかし、あのような逃げ方こそ、最も正しい逃げ方であることが、今回の震災で証明された。あれから51年経つ。

（南高15回卒　小松栄三郎記）

新　年　会

役　員　会